

## 門柱に思いを込めて ― 與平さんの足跡を訪ねて ―

今治市

明治から大正期のころのことである。今治に與平<sup>よへい</sup>という人が暮らしていた。與平さんは被差別部落出身であった。当時は、同和教育が進んでおらず厳しい差別の現実があった。そのため、家が貧しく、ほとんど学校に通えないまま仕事に就いた。

與平さんは、桜井漆器の椀船で九州に行商に行った。仕事を始めたころ、「文字も地図も読めない者にとって、行商は過酷です」と言っていたそうである。しかし、與平さんは、持ち前の負けん気と商才で、苦勞に苦勞を重ねた後に多くの財を築いた。

また、與平さんは、「自分は学校に通えず苦勞した。今の子どもたちはみんな仲良く学校に通い、しっかりと勉強してほしい」と強く願っていた。世の中は、大正デモクラシーの大きなうねりの中で、全国各地で水平社運動が行われていた。與平さんの地域でも、水平社運動が活発に行われていたそうである。與平さんは、自分も何かしたいと思ったのだろう。大正11年(1922年)4月、差別をなくしたいという強い願いから、還暦の記念に市内の小学校に立派な石の門柱を寄贈した。この門柱は、当時から今日まで子どもたちを出迎え、見守り続けている歴史の生き証人である。與平さんの思いが子どもたちや地域の人々に届いているだろうか。残念ながら、21世紀の今日の日本でも、部落差別をはじめ様々な差別が存在している。

小学校を訪ねて門柱を触ってみると、差別のない社会をつくりたいという與平さんの熱い思いがひしひしと伝わってくる。私たちは、與平さんの差別をなくしたいという強い思いに立ち返り、この思いを多くの人々に伝えていかなければならない。



[参考資料]

愛媛県人権教育協議会 「えひめ人権・同和教育No.111」